吸血姫とミ『メイド』に搾られて今夜も眠れない

【小説】夜士郎
【挿絵】空維深夜

立ち読み版

序　章　006
第一章　搾精は突然に　007
第二章　エッチなスイーツとおみ脚たち　050
第三章　はじめての吸血姫　084
第四章　メイドの憂鬱　142
第五章　お嬢様とのはつでーと　176
第六章　真っ白なお薬はいかが？　200
第七章　これからもいつまでも　222

登場人物紹介

Characters

エナ

セイラに仕える一見子供のようなメイド吸血鬼。クールな見た目で毒舌家。適応力も高く、家事も万能な優秀な付き人。

セイラ＝カルマード

吸血鬼の貴族。永らくロザリオに封印されていた。豊満なボディで妖艶な雰囲気を出そうとするが隙だらけ。

水科浩人（みずしなひろと）

日々のオカズに困る性欲旺盛な少年。剣道部に所属している。偶然、吸血鬼を復活させてしまった。

セイラは物珍しげに手摺の向こうを覗き込んでいる。
「……んでお前は、その制服をどうしたんだよ」
「うむ。親切な者がおってな。私に献上してくれたのよ」
どうせまた術でもかけたのだろう。心の中で哀れな被害者に手を合わせる。
セイラの着込んだ制服は、どうもサイズが合っていないようだ。スカートはやたら短くて脚が剥き出しだし、シャツの胸元は張りつめて今にもボタンが弾け飛びそうだ。
（……なんか、こう）
「むちむちの制服姿がエロいですよね浩人様」
心を読んだかのようなエナのセリフに「うぉっ」と浩人は肩をはね上げた。
「なかなかによい布地を使っておる。みなこのような衣服を着用しておるとは、ここは、人の貴族が集まる学舎かの？」
「……いや。別に。ごく普通の、一般庶民の集まるトコロだよ」
「なんと。この時代は庶民すらも、制服を着て勉学に励むことができるのか」
感心したようにセイラが頷く。
「なあ。お前らって、どんくらいの時代に、どのあたりで生きてたの？」
「この時代から見れば、およそ四百から五百年ほど前のヨーロッパでしょうか」
「へえ……」
世界史の授業を思い出してみる。いろいろと、混迷を極めていた時代でなかったか。

「ええ。時間経過の意識があまりない私たちからしてみれば……まるで、地獄から天国へと世界が塗り替えられたかのよう」
なにやら大袈裟に言いながら、エナは敷物の上にいくつかのタッパーを置いていく。
その中に収まっている料理の数々は、どうやらお手製らしい。
「ささ、どうぞ浩人様。存分にお召し上がり下さいませ」
「……また、なにやら意図を感じさせるレパートリーだなぁオイ」
鰻の蒲焼き。牡蠣フライ。とろろ。豚肉とオクラの和え物と、どれも精力のつきそうなものばかりだ。この白身の刺身は何だと聞いたら、スッポンだと返ってきた。
「……お金はどしたん」
「母君から財布を預かっていますので。期間中のお食事はご心配なさらずに」
……どうやら一人息子は従姉妹よりも信用されていないらしい。
「ククク。貴様には質のよい精液を供して貰わねばならぬでな。毎日の食事も大切よ」
と、セイラが浩人の隣にどっかと腰を降ろした。あぐらである。
「精液の摂取ははしたないとか言ってたのどうなった。貴族の誇りはどこいった」
「言ったであろ。下僕のそれは問題ないと」
「そりゃまた都合のいいことで……」
どうやら貴族様は吸精に対して開き直ってしまったご様子。これもメイド教育の賜物か。
「ささ、浩人様。お口を開けて下さいませ。あーん、です。あーん」

「ちょ、い、いいからっ……自分で食べるからっ」
「まあまあ、そう言わずに。あーん、して下さいな」
このメイドやけに押しが強い。仕方なしに口を開いて、牡蠣フライを迎え入れる。
「んぐ……むぐもぐ……。……へぇ。美味いな、これ」
「衣に味付けをしていますので。お口に合ったようで、なによりです。はい、あーん」
無表情とはいえ、とんでもなく可愛いロリっ子の「あーん」である。
（……まあ、そりゃ悪い気はしないがね）
そんな事を思いながらモグモグと咀嚼していると、
「貴様、私には生意気じゃのに……エナには妙に素直じゃのぉ？」
セイラがちょっぴり頬を膨らませていた。
「いや……そうかぁ？」
「お嬢様。羨ましいのでしたらお嬢様も、あーん、してあげたらよろしいかと」
「なっ……！　ばばばば、馬鹿を言うなっ！　下僕を相手にそんな事ができりゅかっ！」
いきなり顔を赤らめて、主従の関係を弁えろと怒鳴ってくる。
「どうやらお嬢様は素直になれないご様子。はい浩人様、もう一つ、あーん」
「……わざとか、お前」
このメイド、わざわざセイラに見せつけるようにしている。
「ええいっっ！　さっさと喰ってしまえっ、さっさとっ！」

と、セイラはエナの手から強引に箸を奪うと重箱と一緒に押しつけてきた。
「んだよ、忙しない。貴族たるもの優雅たれ、じゃないのかよ」
急かされるまま弁当を片付けていく。どれも味付けは一級品で、箸の進みは抜群だ。
「……ふう。ご馳走様」
「はい。どういたしまして」
浩人が食事を終えたタイミングを見計らい、エナがお茶を差し出してくる。ほうじ茶だ。
「サンキュ。いい嫁さんになれるよ、お前」
そう言うと、ぴたり、とエナの動きが止まった。
「……どうも」
返答はやけに小声であった。
「さあさ、喰うたか。喰い終わったかの？」
と――。なにやらうずうずとした様子でセイラが身を寄せてきた。
「な……なんだよ」
ぱっつんぱっつんに張りつめたシャツの胸元が目の前に迫り、思わず顔を背けてしまう。
吸血の少女はそんな少年の純情など知らず、さらに美貌を近づけて。
「ならば次は私の番だ。下僕よ、私に食事を供するのだっ！」
「食事っ……て。お前、まさか」
うむ、とセイラが頷いて。

「貴様のせーえきよ。まさかあるじが空腹のままで下僕が腹を満たせると思うたか？」
いそいそと浩人の股間に手を伸ばしてきたのだ。
「い、いや、待てっ……こ、こんなところでっ……！」
こんな、人目のあるところで、と階段室の向こうを覗き――愕然とした。
誰も、いない。十人以上はいたはずの屋上に、いるのは浩人ら三人だけだ。
「な……なんだ、これ」
「心配するな、人払いの術をかけた。これで問題はあるまい。さあ、私に――」
「お、大ありだっ！　外だぞっ、学園だぞっ！　そ、そんなところでっ」
「浩人様。ここは従われた方がよいかと。誰にも見られてはいませんし、ぶっちゃけこのワガママお嬢様を大人しくさせるには他に方法はありませんよ」
冷静なエナのセリフに、立ち止まる。……とりあえず、空腹を満たしてあげればこの吸血のお嬢様は満足するのだ。そうすれば平穏な学園生活が戻るのだ。
「……わ、わぁったよっ……！」呻くように、答える。
「うむ。それでよい。ククク、少しは物わかりがよくなってきたかの」
セイラがじゅるり、と舌なめずりをする。膝立ちになって、浩人のズボンに手を伸ばす。
細い指先がチャックを降ろすと、下着の中からペニスを引きずり出した。
それは少女の目前でみるみると膨張して、あっというまに勃起しきったのだ。
「なんじゃ、貴様のココも、期待していたのではないか」

「い……いやあまあ、その……ねえ？」
セイラの身体にぴちぴちと張りついた制服は、その肉体の豊満さをより際だたせている。いつもはロングスカートだから、ミニスカから覗く両脚がなんだかまばゆく見えて、太股にムッチリとニーソックスの食い込んでいる様子も興奮を掻き立てる。
いつも見ている制服なのに、セイラが着るとこれほどいやらしく映えるのか。
それに、あの胸だ。
「クク。なんじゃ。そんなにこれが気になるのか？」
浩人の視線に気付いたセイラが乳房を抱え、ぐい、と突き出してくる。布地が引っ張られて、ボタンの継ぎ目に覗く肌色がくぱぁと範囲を広げていく。ノーブラなのだろう、小粒な膨らみが二つ、左右につんと突き出していた。
（相変わらず……お、おおきい、な……）
ごくりと生唾を呑み込む。生々しく重量感たっぷりの、少女の巨乳から目が離せない。
「なんとも熱い視線よの。おっぱいが焦げそうだ。さて……」
セイラの膝が一歩前に出る。その手がペニスを摘み、水平に倒す。そして。
「貴様の所持していたえろほんにあったぞ。こういうのが、好きなのだろう？」
なんと彼女はペニスの先を、ボタンとボタンの間に見える肉の狭間へ突きつけたのだ。
「せ、セイラっ……おま、勝手にっ、俺の本をっ……」
「お嬢様……なんといやらしい。まるで、アソコのようではないですか」

シャツの隙間から垣間見える肉の溝をエナが揶揄する。その物言いにお嬢様の頬が赤く染まり、けれど余裕の表情はどうにか崩さない。
「ああ。今から貴様のちんぽが、このおっぱいに突き刺さるぞ。まっすぐに、私の心臓をめがけてな。ほぉれ、こう……ずぶずぶ、とな……」
そうして彼女はその胸を浩人の腰に寄せていく。シャツに包まれたままの、柔らかくて豊満な乳塊に――勃起ペニスが潜り込んでいく。にゅむぅり、ずぶ……、と。
「っ、くぉぉお……！　やっ、やわらけぇええっ……！」
それは生まれて初めて感じる柔らかな刺激であった。ペニスの根本までが、むっちりとした粘っこい肉塊に包まれていく。亀頭が、肉幹が、傘の裏まで――柔肉は余すところなく張りついて、その温度と感触とを海綿体に伝えてくれる。
「おお、おお。気持ちよさそうな顔をしおって。ちんぽもドクドク波打っておる」
両の手で左右から乳房を抱え上げた、セイラの顔は愉しげだ。
「ほれほれ、よいぞ。腰を動かしても。もっと気持ちよくなりたいであろ？」
挑発的に柔肉を揺さぶってくる。ぷるぷるんと震える乳肉が男根をねちねちとなで回す。
「あっ、ああっ……。んじゃ……」
ゆっくりと、腰を引く。ずず、ずずず！　と亀頭が擦れて痺れるような快感が背骨を駆け抜けた。「うああっ……」と呻きながら、半ば姿を現した肉棒を、再び押し込む。
引いて、押して、引いて、押して。自ら腰を使って、乳肉でペニスをしごき立てる。

「き、もちいっ……これ、腰が抜けそうっ……」
特に引くときがたまらない。亀頭のエラが捲れ海綿体が擦られて、魂を吸われるような心地よさに襲われる。それに、自分の手を使わずに腰だけを動かすというのは不思議と快感の度合いが違った。固定したオナホールでオナニーをするとこんな感じなのだろうか。
「うっ……はぁっ、はぁっ……うう、ふぁぁああっ……！」
押し寄せてくる強烈な性感に突き動かされ、少年は固定されたおっぱいオナホに夢中でペニスを出し入れする。揺さぶられる柔肉、ピッチピチのシャツボールがたわんで潰れてを繰り返し、ボタンは今にも弾け飛びそうだ。
「ど、どうじゃ？　おっぱいでちんぽをゴシゴシ擦るのは気持ちいいか？　ああ、おっぱいのなか、熱いぞ……。ヤケドしてしまいそうだ……」
胸にペニスを呑み込んだセイラの声は上気していて、細腰が悩ましげにくねっている。そんな彼女の興奮を表すように、肌には玉粒の汗が噴き出していた。肢体に張りつく白シャツはたっぷりと汗を吸い込んで、生肌のその色を色っぽく浮き上がらせていた。
細い肩や、肋骨や。縦パイズリにはねる乳房もまた同様に肌色を透かせている。
「はっ……はぁっ……！　セイラのおっぱいっ……すっげえ、エロっ……！」
シャツに肌の色を浮かべてゆっさゆっさと揺れる二つの豊乳、その先端はぷくりと尖りきって、うっすらとした桃色まで刺激的に見せつけるのだ。
ずりりっ、ずりずりっ！　ずっちゅ、ずりっずりりっ！

「夢中だな、ヒロトよ。ククク……。ああ、熱い。おっぱいが擦り切れそうだ……」
射精感がこみあげてくる。勉学に励むための学園で精液を吐き出そうとしている。ひどくイケナイことをしている気分に襲われて、それがなおさら浩人の腰を激しく振らせる。
ずっぷ！　ず！　ずっぷ！　ずぶぶ!!
「はうくっ、ううっ！　で……るっ！　もうっ、でるっ……！」
「そうか。ほれ、出せ出せっ。私のおひるのざーめんを、たっぷりとっ……！」
嬉しそうにセイラは笑い、左右から、おっぱいをぎゅうう～と押しつけてきた。
「う、うぁあっ！　でるっ、でるでるっ、くぅうう～～ッ！」
男根の全体を襲う優しい締めつけに、浩人は背を反らせながら腰をぐっぐっとセイラへ押しつけた。そして。
びゅるぴゅるうう！　びゅるびゅるじゅぶりゅ！　ぶちゅぶりゅぅううう！
温かな乳袋の内側に――快悦の肉汁をドバドバと吐き出したのだ。
「んっ……フフ。でておるでておる。貴様のざーめんが、おっぱいのなかで、どっぴゅどっぴゅしておるぞ……。おちんぽが、ぴくぴく震えておるわ……」
粘ついたオス汁を中出しされて、吸血の貴族は苛めを楽しむ小悪魔のように笑う。ぱたぱたと羽ばたく黒翼は、嬉しげだ。
「あ、ああ……く、うう……ふぅ、ふぅ……」
ぴゅるる、ぴゅるると……とろけるような快感液を、乳オナホールに全て注ぎ込む。

「ほれほれ、エナ。今からおぬしの大事なトコロに、ヒロトのチンポが入ってくるぞ。痛いし、さっきのでわかったろうがこやつはやたらと乱暴じゃ。覚悟をするがよいぞ」
そんな浩人の内心をよそにセイラはなんだか愉しげだ。
エナより先に破瓜を迎えたことに、ちょっぴり得意になっているみたい。
前から思っていたけれど、二人の関係は主従とともに姉妹のようなそれもある。
「けいけんほーふな私がおるからの。まかせておけいっ」
つまりセイラは。たまには、生意気な妹であるエナに対してお姉さんぶりたいのだ。
「……浩人様。あの。お嬢様は一度言い出したら聞かないお方でして」
「ああ。もう、充分に思い知らされているよ」
「ですから――。私も覚悟を決めました。……お願い、します」
と。そう言いながら……ロリメイドは自ら縞ぱんの、股間部分をずらしたのだ。
現れるのはつるりとして毛の一本すら生えていない無毛地帯。つやつやと、輝くような大陰唇は、大股を開いているのにぴっちりと閉じきっていて。興奮よりもまず先に罪悪感を覚えてしまうような、それはあまりに幼げなスジマ○コであった。
少女はさらにその下唇を左右にくぱぁ……と開く。
――鮮烈なほどに桃色の小さな花が、股間に咲いた。
「私を、お嬢様と一緒にして下さい。浩人様の猛々しいそれを、私のま○こに挿入れて下さい。きついきついこどもま○こで……精液をギュウギュウ搾ってさしあげますから」

そんな卑猥な物言いをしながら。エナはその時、ほんのりと微笑んだのだ。
「……わあったよ。挿入れてやる。お前のま○こで精液をたっぷり搾ってもらうからな」
実際のところ、浩人の情欲には再びのエンジンがかかっている。
ああそうだ。一発放ったぐらいではまるで足りない。
昨日のように、何発も何発も――女の子の腹の中に、その奥にぶちまけたいのだ。
「でもこれ……大丈夫なのかよ、本当に？」
それにしてもあまりに小さな肉孔だ。とても入るとは思えないくらいに幼げだ。
「吸血鬼を舐めるでない。その程度、どうということもないわ」
……今日一日足腰の立たなかったヤツがなんだか偉そうである。
「はい。お兄ちゃん。遠慮せず……ずぶって、して下さい」
頷くエナのヴァギナは濡れてはいるようで。
おもらしをしちゃったみたいに透明な汁が、ひとすじの輝きを描き出している。
鈴口をスジに押し当てる。とたん、びくとエナの小さな肩が震えた。
「……挿入れるぞ」
こくり、とツインテールが頷く。それを確かめてぐっ、と腰を押し込んだ。
みちちっ……みちみちみちぃっ！
「っ――――ぎ、ひ……っ！」
噛み締めた歯の隙間から漏れるは苦鳴。少女の痛みを知らしめる。

「か、ぁあああっ……!?　き、きっ……つっ！　チンポっ……潰れ、るっ……！」
喉管などまだゆとりがあったと、そう思えるほどに狭隘な肉孔であった。亀頭の先が入ろうとして、肉幹がへし折れそうなほどの反抗にあい、ぐっ、ぐっと腰を押して亀頭の半分をなんとかめり込ませると、とたん噛み千切ろうとするような締めつけに襲われた。
「っ……はっ……！　っ、ひっ……ひぎっ……！」
エナが胸の前で拳をぎゅうっと握る。その羽がぴぃんと左右に伸びる。
下唇を噛み破瓜の痛みに耐えるロリメイドの瞳から、涙がひとすじ流れて落ちた。
「エナよ、ほれ――もっと力を抜けい」
セイラの唇から艶めかしい肉舌が這い出てくる。その舌が、エナの首筋をぬるりと舐めた。――そこに穿たれた二つの孔を。優しく、労るように。
「あ……お、じょうさまっ……」
恍惚とした吐息を漏らす少女の黒翼がそのときだらり、と垂れ下がり。するとどうだ、侵入者を通すまいと頑なであった肉孔が、わずかに緩んでいくではないか。
「思い出せエナ。ここに牙を突き立てられた、その時の快感を」
「は、あっ……お嬢様の、母君に……噛んでいただき、吸われた……あの時の」
れろ……ねろ……と、二穴を這い回るあるじの雌舌。眉根を垂らすエナの頬が朱に染まり、吸血孔が濡れるほどに、幼い孔がうるみを増していく。ず……ずず、ず……と。硬い肉を掻き分けるようにして肉の棒は少しずつ少女の内へ潜り込んでいく。

「ああ、はいって……来て、ます……。からだが裂けてしまいそうっ……」
震える唇から漏れ出す息に、甘いものが混じり始める。乳首がぷくぅ、と凝り立つ。
「ぐ……うっ。もう、ちょいで……ぜんぶ、入るぞっ……」
肉茎はすでに半分ほどが埋没していた。ぎゅむぎゅむと噛みつく括約筋、気を抜けば、こちらににゅるんっと押し出されそうな抵抗を振り払うようにして必死に腰を押す。
（ちっと油断したらっ……射精ちまいそうだっ……）
先に一発を放っていなかったら、とっくに暴発していただろう。はたして射精したばかりの男根で、これほどに硬いエナの膣孔を攻略できるものか、浩人には自信がなかった。
特に――今、先を塞ぎ行く手を阻む、肉の膜を相手にしては。
――ぶち、ぶち……。みちりぃっ！
「っ、くひっ……！　か、あっ……！」
エナの赤眼が見開かれ、みるみると涙が溢れ出す。処女膜を、引き裂いたのだ。
「あ、あ……。浩人様の杭が……。しょじょま○こ、やぶっちゃいました……」
呻くようなエナのセリフは、平坦で――けれどどこか嬉しげに聞こえた。
手の平で握りしめられるような締めつけが下腹に熱い肉悦を打ちつける。早くもこみあげる射精欲求に、浩人の腰がひくひくと震えた。
「おくまで……挿入れる、ぞっ……！」
破ったばかりの処女膜を膣壁になすりつけながら、ペニスを押し込む。みちりみちりと

幼いま○こを拡張しながら、やがてその先端が、少女の最奥へづぷんと口づけをした。
「ふぁあぁ――ッ！」
瞳を閉じて戦慄く少女の唇から迸る嬌声。その時ぎゅむぅううっと膣肉が、肉棒を押し潰さんばかりに収縮した。痛いほどの締めつけに浩人は「ううっ！」と呻き。
どびゅ、どびゅびゅ！　びゅるるるびゅ！
熱烈な抱擁を見せるろり膣へと青臭いオス汁を吐き出したのだ。
「ふぁっ、ああっ……⁉　あ、あついっ、あついのがっ、んぁぁぁあンッ！」
灼熱の弾丸に叩かれて、縞ぱんに包まれた下腹がぐぐっと迫り上がる。克明に浮き上がる肋骨がくねり、小さな身体はあるじの腕の中にて震えあがる。
その未成熟な子宮へと、ドクドクと子種を流し込むのだ。
「くっ……ううくっ……！　はあっ、くああっ……」
強烈な締めつけに誘われての射精は、まさしく搾られているかのようであった。
「浩人様のっ……お兄ちゃんの熱いのっ……赤ちゃんの部屋に、入ってますぅっ……」
うっとりとしてエナが己の下腹へ手の平を当てる。今もその内側では、搾り取るような肉壁の収縮に、ホースに残る一滴すら吸い取られている最中だ。
「はあっ……はあ、はっ……あ……」
ようやく射精が終わり、荒い息を吐く。頭蓋にじーんと射精の快感が響いている。
「まだまだ……これからですよね、お兄ちゃん？」

破瓜を迎えたヴァギナは少年のペニスを掴んだまま放そうとしない。エナがくいくいと腰を動かすと、その内部で揉み込まれる海綿体に興奮の血潮が流れ込む。
「お兄ちゃんのちんぽ……また、なかで、硬くなってきましたよ？」
可愛らしくエナが首を傾げる。黒翼が嬉しそうにぱたぱたしている。
「ククク。こやつが一発程度で収まるものか。のう？」
昨日、さんっざんに責められた吸血少女が皮肉げに笑った。
「ああ。まだだ。腹一杯に……搾らせてやるから、よっ……！」
ぐん、と腰を押すと「あヒィッ！」とエナが顎を仰け反らした。少しだけ腰を引く。しっかりと膣肉にしがみつかれたペニスは一センチも後退せず、またづぶんと押しつければ「かはっ……！」と肺腑から息を漏らすエナの瞳が上向いた。
少女の行き止まりに達しても、まだ指の二本ぶんは表に出ている男根である。その長さが存分に、未熟な子宮を打ちのめすのだ。
ぐちっ……ずぶちっ！　ぐっち、ぐっち、ぐっち！
「かはっ、んはぁっ……！　は、ヒィッ！　んひぎっ……ん、くヒィイインッ！」
それは抽送というよりも掘削というに相応しい。肉の槍に、掘削される肉の虚（うろ）。
メイド服のフリルがひらひらと舞い、銀色のツインテールがゆらゆら揺れる。肌を桃色に染め上げて、気持ちよさと苦しさとを混じらせた嬌声を吸血メイドが奏でている。
「ふむ。まだちょっぴり、苦しそうじゃのエナ。ククク……」

と、その時だ。セイラが右手の人差し指をぺろりと舐めて。
その指先をエナの股間へ伸ばす。被虐に苛まれる幼ヴァギナの頂点で、ぷくりと膨らむ肉の粒――それを唾液にまみれた指先で、ぬちょっ、と擦ったのだ。
「んはぁっ⁉　お、お嬢様っ⁉　ん、んにゃあゅ⁉」
とたんにふるるっと吸血メイドの身体が震え、その唇から艶めく悲鳴が迸った。
「ほぉれ、ほれほれ。ここを弄られると、アソコがふにゃってなるじゃろう」
にゅるっ……にゅるるっ、くにゅる。濡れた指先がクリトリスを優しくこねまわす。
「んっ……は、んっ……！　そ、そこ、ああっ……」
さらにあるじの左手はメイドの胸板へも伸びる。その微乳の頂点でほんのりと桜色を濃くするロリ乳首を、スリスリと撫で上げ、指先で摘み転がした。
「ひぁあっ、お、お嬢様っ、そんな、んふぁあんっ……！」
エナからこんな声が出るのかと、驚くほどに甘い悲鳴であった。
「ククク、おうおう、いい声よのっ。こんな貴様を見るのは初めてじゃ」
実に愉しそうに――普段からかわれている意趣返しとばかりにセイラが笑う。
濡れた指先に淫核が潰されて、膣肉がキュムゥと縮みあがる。圧搾される海綿体は被虐の快感を吐き散らし、浩人の下腹を燃え上がらせる。さらに乳首をクリクリと転がされるエナの腰はくねりをうって、男根を腹の内でねじ曲げるのだ。
「く、ぐっ……かっ……くうっ！　あくう、ま、またっ、でるぞっ……！」

ビュルルッ……びゅるるっ！　びゅるっ……びゅるばびゅりゅッ……！

「ひぃいいんっ、また、またでてますぅっ……！　わたひのおま○こっ……せーえきを、しぼっちゃってますっ……！　あついの、どびゅどびゅはいってますぅっ」

子宮口へばちゃばちゃと精液をぶっかけられ、エナは嬉々として脚をばたつかせる。みっちりと詰まりきった坑内に漏れ出る隙間などなく、少年の子種汁はそのほとんどが、赤子を成す準備などできていないだろう子宮の中へと流れ込んでしまうのだ。

「はぁぅ、はぅ。いい、いいですっ……いっぱい、浩人様の、せーえきっ……子宮が溶けて、しまいそう……っ！　長いチンポでずぶって突かれるの……きもち、いいっ……」

氷の仮面を柔らかく溶かし、少女は押し寄せる官能にメイドスカートを震わせる。乳首を捏ねられ肩をよじらせ、クリトリスを弄られて腰をビクンとはね上げる。性感に対するその鋭い反応が、少女を襲う快感の大きさを教えてくれる。

「っくっ、はあっ、エナっ……エナっ……！」

ひりつく快感に腰が止まらないのは浩人も同じだ。

セイラのそれと比べて硬くきつい粘膜に肉棒が潰されそう。背骨そのものが、ロリ粘膜に削がれているようで、その肉悦とたまらない[redacted]姦悦の興奮とに突き動かされて幼い陰唇を強く強く責め立ててしまう。精液をへばりつかせた亀頭にて子宮の入り口をぐちゅっぐちゅっと擦り上げて、吸血のメイド少女にさらなる快感を与えるのだ。

「は、んはぅ……！　私の……エナのきつきつマ○コ、いかがですか……？」

「くっ、うう！　ああ、凄……い。すごい……ちんぽ搾りま〇こだっ」
ぶちゅ、ぶちゅ、ちゅぶぐちゅぶ！　子宮口へ鈴口をねじ込もうとするように何度も押しつけると「んひぃ、ひぃ……」と眉を寄せ、鈴の鳴るような悦鳴を漏らす。
「まったく、あのエナがここまで可愛くなるか……貴様のチンポは凶器じゃの」
呆れたようにセイラは腕の中で身体をよじらせるメイドの乳房と淫核を責める。
「あうあう、お、おじょうさまっ……！　いましょこっ、わたし、おかひくなりますっ」
構わぬ、おかしくなれ――と意地悪なあるじは指を止めない。
「んふぁあっ、ら、めっ、あうううっ！　わたひ、も、もう、うう、あうううっ」
ぐぐっ……とロリメイドの腰が反り上がっていく。半開きでだらしのない唇から涎が溢れ、肋骨がなおも浮き上がり、真っ赤になって汗まみれの太股が筋肉の腱を描き出す。
「うむ、よいぞ。見られながらイッてしまえ、私の従僕よ――」
そしてセイラの指先がクリトリスを摘むや――ギュム！　と抓り上げたのだ。
「ヒィ――――――ッ！」
ビクンッ！　と少女の腰がはね上がり、下腹がうねる。膣肉がこれまで以上の圧力でもって、精管から精液を絞り出そうと強烈に締め上げてきた。
「く、う、うううう――――！」
びゅるるっ！　びゅるばりゅぶ！　どびゅるるる、びゅるるるうううう！
たまらずに――浩人の情欲が弾けた。

「まあまあお嬢様、大人しくしていて下さい。浩人様、これを」
ジタバタと暴れるセイラだが、エナに両脚を押さえられてしまう。そうしてロリメイドは座薬とともに、小瓶を一つ浩人へ手渡した。小瓶の中には白濁した液体が入っている。
「これ……精液かよ」
「はい。浩人様のです。それを座薬に塗って、入れてあげて下さい」
「ちょ、入れる⁉　入れるといったかエナっ⁉　なにをっ、どこへっ！」
布団の向こうから慌てふためくセイラの声が聞こえるがエナは意に介していない。
「……これを。セイラの、おしりに」
ごくっ……と唾を呑む。目の前で、汗ばんだ桃尻がふりふりと揺れている。
「ま、まあ……治療のためだからな？　しょうがないよな？」
言い訳をしながら小瓶の中身を少しだけ手に取る。自身の精液に対する忌避感よりも、それを貴族様のコーモンへ塗り込むという興奮の方が勝っていた。
座薬へ精液を絡めて、横からセイラの尻を覗き込む。
くびれきった細腰から、驚くほどに張り出した尻山であった。卵形で悩ましく盛り上がるヒップは、太股へ向けなだらかな稜線を描くに至る。風船のように張りに満ちた肉肌は、汗ばんでツヤツヤと輝いていた。
「ど、どこを見ているのじゃっ！　そ、そんなところ治療に関係あるのかっ！」
尻たぶを両手で掴む。「ひゃうっ⁉」とセイラの悲鳴。すると尻肉の内部で確かに息づ

く筋肉が、うねうねっと蠢くのがわかった。その尻肉を左右に開く。
くぱぁっ……と開いた肉の、谷底に。放射線状に皺の集まる窄まりがあった。
ピンク色の、驚くほどに綺麗で――そそる肛門が。
「……セイラって。こんなところまで……エッチなんだな」
「にゃ、にゃにをっ……！　は、はなせっ、私をからかって遊んでおるのじゃろっ」
布団の中で身もだえするセイラが、「コホコホっ」と咳き込んだ。見惚れている場合じゃない、早く薬を入れてあげよう――と。摘んだ座薬の先を、窄まりへ押し当てる。
「んひぃいっ⁉　ちょ、ちょちょっ！　な、なにを、どこへっ……んひぃいいいいい⁉」
そうして、その精液まみれの座薬を挿入していく。
半分を入れたところで、人差し指の先っぽでぐいぐいと押し込んだ。すると、にゅるんっ……と座薬が沈み込んでいって、わずかに開いていた窄まりがキュッと閉じる。
「浩人様、もっと。もっと深くまで入れないと効きませんよ」
「え、エナっ、きさ……みゃぁっ！　ん、く、うぅうんっ」
抗議の声は儚く散る。浩人の人差し指が、その第二関節までを肛門内に潜らせていた。
「うわ、中、あつ……」
肉の門にて括約筋がきゅっきゅっと指の付け根を締めつけて、その向こうは熱い粘膜の海であった。指先に、ネットリとしたスライムみたいなものが絡みつく。それを振り解くように指を泳がせると、「んんっ、んひぃーっ！」とセイラが切なげな悲鳴を上げた。

指先にコツンと座薬が当たる。それをぐぐぐっと押し込んでいく。
「やへっ、ふ、ふかいっ！　おひりに、ふかくに、んんん～～～～～っ！」
そうして精液を粘膜に染み込ませるように、指の腹でゴシゴシ腸壁を擦ってみた。
「ふぁあ、なんじゃ、なんじゃこれぇっ！　しりが、しりのなかが、やけるぅぅっ」
とたんにセイラの美貌はとろけて赤く染まっていく。
きゅんきゅんと尻肉が引き攣れて、指の骨を軋ませるほどに肛門が噛みついてくる。
「あ、んふぁ、んっ……くぅううんっ！　おひりのなか……あついぃぃぃ～～～」
戦慄く少女の喉から艶を帯びた嬌声が漏れ始める。そこに風邪の嗄れはない。
「どんどん治っています。さすがに直腸へ精液を、直接塗布は効きますね」
と、エナ。そういうことならと、浩人はさらに直腸内へ精液薬を塗り込んでいく。
指を根本まで突っ込んで。「くふぉ!?」さらに抜けそうになるまで引っこ抜く。「んひぃいい！」また突っ込んで、内部で鈎状に曲げて。「はぎっッ」そのまま手首を捏ねるように、引っかき回す。「～～～～～～ッ！　～～～～～～ッ！」
ぶんぶんと震える桃髪、パジャマの内で羽が暴れている。尻孔をほじるその指から逃げようと豊満ヒップがぐぐぐっと迫り上がって、膝が立ち、布団が床へ落ちる。
「あぉ……おおっ！　し、りぃっ……！　コーモン、お、ひりのなかっ……！　そんにゃに、ほじくる、なっ……くひぎっ！　もえりゅ、おなか、もえてりゅぅうっ！」
ぐにゅり、ぐにゅ！　尻をほじるほどに桃尻は悶え、艶めかしい蛇のように背筋がうね

った。硬い腸肉は少しずつほぐれ、括約筋の抵抗は甘噛み程度だ。人差し指をずっぽずっぽと出し入れできるくらいの、脆弱な肉門となってしまった。

「いや、くひっ、ひっ、ひっ！　ああう、ううっ、来る、くるぅううっ！」

尻孔をほじられよがり啼くセイラの身体がぶるるっと震えた。精液に濡れる直腸内が、かぁっと発熱する。眉根をぎゅうと寄せ、汗まみれの少女は顎先をはね上げて――。

「んくぅぅう……あぅう、おひり、い、イクっ……！」

押し寄せるほじくりアクメへと、総身を震わせながら蕩け落ちていくのだった。

「ふっ……ふ、ふう……は、はううっ……」

赤く染まった豊満ヒップが震えて落ちる。枕に顔を突っ込んで、汗まみれの少女は甘い吐息を漏らしている。浩人が指を引き抜くと、その身体がぶるるっ、と震えた。

「んふぅ……ん。おひり、おひりのなかぁ……せいえき、ジンジンするぅっ……」

セイラの尻がもぞもぞと布団の上で揺れていた。汗を吸い込んだパジャマは柔らかく起伏に富んだ肢体の形をあらわとしていて、その媚体がどこか妖しくよじれている。

「おひり……あつい、いいっ……どうひて、こんなにっ……はううんっ……」

塗りつけられた精液が少女の粘膜を焼いているのか。総身を桃色に染め上げるセイラのヒップが蠱惑的に揺れ、その狭間にある肉孔は指一本分を開いたままだ。

「それはですね、もっとって身体が欲しがっているのです。元気になるためのお薬を」

「ふぁあ……。げ……げんきに、なる、ためのっ……」

「そうです。浩人様。お嬢様に、もっとお薬をちゅうしゃしてあげて下さい」
「いや。ち……ちゅうしゃっ、てっ……お前」
エナが何を言っているのか、それがわかる。
頭の中でその行為を想像するだけで、股間がギンギンに尖っていく。
――アナルセックス。
セイラの……女の子の肛門にチンポを突っ込めと言うのだ。
あの、排泄のためだけにある孔に挿入れて、射精しろと言うのだ。
それはそれは可愛らしい窄まりである。あんな狭苦しい孔に――なんて。
「……構わぬ、挿入れよ、ヒロトっ……これは、治療なのじゃからっ……」
首をねじ曲げこちらを見上げる、セイラの瞳は熱く潤んでいて。
彼女は官能に落ちた膝を立てると、見せつけるようにヒップを掲げてきた。
「ちりょうじゃから、しょうがないのじゃから……」
それは自らに言い聞かせるような声色で。
「じゃから……コーモン……はめはめして、せーえきびゅっびゅって出すのじゃっ……」
上擦った声で喘ぎながら、少女は己の尻肉をむにいっと左右へ掻き分けたのだ。ほぐれた尻孔は弾力に富んで横へ広がり。その内側にある真っ赤な粘膜すら見せつけてきた。
肛門へ挿入れてと。その中をチンポで抉ってと。
「……せ、セイラっ……！　そんな風にされたら……抑えきれねえよっ」

湧き上がる興奮のまま、彼女の尻を抱えるようにして尻谷へ股間を合わせる。ペニスを掴んで、その先端を吸血貴族のアスホールへと導いていく。鈴口が肛門に触れた瞬間、括約筋がふわ、と緩んだ。まるでペニスを迎え入れようとするかのように。

逸る気持ちを抑えて。ゆっくりと、腰を押し込んでいく。

みちぃ……と皺門を引き伸ばしながら、猛る肉器官が排泄の孔へと潜り込んでいく。

「んお、んおぉっ……！　は、いってっ……く、るっ……！　し、尻にぃっ……」

セイラの背骨がぐぅっと撓み、マットレスへ乳房が埋まる。苦しげな、けれど間違いのない喜悦を含んだ吐息が、桃色の唇から垂れ落ちていく。

「お、お、ぎ、ぃっ……おしり、ひろがるっ……！」

ペニスの直径に拡げられ、引き伸ばされていく肉孔は真っ赤だ。強制的に拡張されながら、千切れる寸前のゴムのように、ぎゅっぎゅと肉根を噛み締めてくる。

（す、げっ……俺、いまっ……！　尻の孔に、チンポ挿入れてるっ……！）

そのアブノーマルな行為への興奮が脳を焦がす。精液によって濡らされていた肉孔は裂けることなく、ずぶ、ずぶぶと滑らかに、浩人の肉棒を呑み込んでいくのだ。

「んぅぅぅう……っ！　んくっ、はうっ！　ひぃ、ひぃいっ……」

少女の両手はシーツをぎゅうっと掴んでいる。イケナイ場所にペニスを突っ込まれて、眉根をぎゅっと寄せて、押し寄せる拡張感にふるふると首を振る。

「ああ……わたしのっ……きぞくの、おしりがっ……やぶられてくっ……！　ううう、お

しりのしょじょまでっ……げぼくに、ささげてしまったっ……うう、ああンっ」
己の惨めさに酔いしれた声音であった。そして浩人にはそれがよくわかる。アヌスを犯されるというのは、なにかこう――ひどく惨めで、被虐的な気分にさせられる。
「ああ……。セイラのうんち孔、俺のを、呑んでしまうぞ。ぜん……ぶっ！」
腰を掴み、腰を押す。尻肉を掘削していく肉ドリルが、根本までぐちりと埋没した。
「んくはっ⁉　う、ふ、ふがいっ……ふがいところまで、ちんぽ、きたぁっ……⁉」
大きく瞳を見開いた、少女の汗まみれのプリ尻がひくひくっと震える。
ペニスに伝わる感触は指先で味わったものとは比べものにならない。きつい括約筋を潜りぬけた向こうにある、熱く重い粘膜のカーテンが、幾重にも肉幹を包み込み。うねり、うねりと亀頭をなで回し、溢れ出るカウパーを貪欲に啜り上げていくのだ。
「くっ……！　セイラの、コーモンっ……すげ、嬉しそうっ……！」
まるでべつの生き物のように、蠢く少女の直腸である。尻孔へ挿入れているという変態行為への興奮が、アヌス性感の快悦を倍増させて浩人の肢体を戦慄かせる。
ぐ、ぐ、ぐ……と腰を引く。肉根へ肛門肉がへばりついてくる。
「～～～～～～～っ！　ひ、ひぃいっ⁉　そ、それ、んひぃいんっ……！」
桃尻の表面にぶわっと鳥肌が立った。切なげな嬌声がセイラの唇から漏れる。
引いていくごとに締めつけのきつい肉門にペニスの鞘が削がれていって、亀頭の傘が出口付近に引っかかる。皺孔を捲りあげながら、抜ける寸前まで引く。

「んぉお……ひ、ひくの、ひくのぉ……あたまのなか、クルぅう……っ」
また奥まで押し込み。「んへぇっ！」ゆっくりと――引いていく。
「んにゃぁあっ、んひぁああっ！　でりゅっ、おひりからなにかでてくっ！　ひぃ、ひぃいっ！　も、漏らしてる、みたいでぇっ……！　ふぁぁあぁ～～～～ッ！」
ぶんぶんと首を振り乱す少女は排泄快楽に酔いしれて、強制的な排泄運動に抵抗する括約筋はうねりを増してペニスを揉み上げ浩人の理性をぐずぐずに蕩かしていく。
「は、あっ……！　も、挿入れてるだけでっ……きもち、いいっ。セイラのうんちあな、エロすぎっ……！　精液が欲しいって、うねうねしてるっ……！」
「んんんっ、ふぁあっ……。こ、これ、はっ……ちりょう、じゃっ！　え、えっちじゃあ、ないぃっ……！　ん、くぅっ……じゃから、はやく、はやくぅっ！」
早く精液をおくれと――肛門が、きゅっきゅと締まった。
「うくっ！　ううっ！　わ、わかったっ……！　いくぞ、白いお薬出すぞっ……！」
吐精を呼ぶ快感の膨張に歯を噛み、浩人はプリ尻に腰をぎゅうと押しつける。
――どびゅるっ！　びゅるるるっ！　びゅる、どびゅどびゅっ！
そうして直腸の一番奥へと一際に濃い子種汁を流し込んだ。
「ひ、ひぃいぃッ⁉　あ、あつっ、熱いぃっ！　や、焼けりゅぅううっぅうう！」
とたんセイラの背骨がぎゅうっと反り上がり、瞳を見開き悶絶を始めた。栄養素をダイレクトに吸収する器官への、灼熱のザーメンぶっかけはそれほどに鮮烈だったのだ。

「ふひぃい――ッ！　こ、こんなに、あひゅいのいっぱいっ、や、ヤケドしゅりゅうっ！　ひぃいまだでてりゅっ、ドクドクでてりゅっ！　んひぃ、んほぉおおんっ」

仰け反らせた顎をガクガクと震わせる様子は怖いくらいだ。吐き出される精液の刺激に淫尻をビクビクと痙攣させ、吸血少女は直腸アクメに翻弄されてしまうのだった。

「はぁあう……あうあう。お、ひり、あひゅいい――ンッ！」

桃色の髪をフリフリ揺らし。舌を突き出し喘ぐセイラ。その尻肉はアヌスの快感に身悶えて、男根をギュムギュムと揉み立てる。精液を無理矢理に吸い出されているような刺激に、浩人は腰をビクビクと震わせながら肉汁を注ぎ込んだ。

「はぁっ！　はぁっ、はっ、はっ……！」

ようやく吐精が収まっても、だが興奮は冷めやらない。尻孔を貫く肉棒はその硬度を維持したまま、さらに目の前の媚肉を耕したいと猛っているのだ。

「……まだ、必要だよな？　俺の白い薬」

指が食い込むほどに尻肉を握りしめる。そうして腰を前後に激しく抽送する。

ぐっちょ！　ぐっちゅぐっちゅ！　ぐじゅぴ！

「くひぎっ⁉　ひっ、ひぁあっ⁉　ひ、ヒロトっ、す、少しまてっ、んふぅううっ」

ペニスに押され背骨がよじれる。こちらの動きを制止するように、伸ばされる右手。その手首を掴む。さらに左手を引っ掴んで、さながら馬の手綱が如く左右に構える。

「……ひ、ヒロト……よ。おひり……ヒリヒリしてて。い、いま、ずんずんされるのは、

まずいのじゃ。精液がいっぱいのおなかを、ずぼずぼされるのはっ……」
セイラの表情は引きつっていて、けれどその声音には隠しきれぬ期待感がある。
「ささ。浩人様。せーえきをおチンポで、ごしごし擦りつけてあげて下さい」
ごー！　です。とエナが親指を突き上げてサムズアップ。それに、頷いて――。
彼女の上体がマットレスから浮くほどに腕を引きつけて、同時に腰を、ズン！　と押し込んだ。亀頭が腸壁をごりごりっと抉り上げて。
「んひぃいいぃ――――ッ！」
顎をはね上げたセイラが馬のいななきにも似た嬌声を迸らせる。瞬間、ばつんっ！　とパジャマのボタンが弾け飛び、たわわにすぎる果実があたりを憚ることもなく飛び出した。
掴んだ腕に籠めた力を少し緩めて、腰を引く。ペニスがず……ず、と抜け出して、少女の背筋が震え乳房がぷるるるるん！　と細かに波打つ。そしてまた括約筋の抵抗を振り解くように強引に突っ込むと、「ひぃーんっ！」と苦悦のいななきを放つのだ。
ぐっじゅ！　ぐっじゅ！　ぐぐっ、ぐじゅずぼっ！
「んっひっ、くっひっ！　やめ、いぎっ！　げぼくの、げぼくのくせにっ、んぉおっっ！　わ、わたひを、うまみたいにひてっ……おひり、犯すなぁあっ！　ぐぉおっ！」
両腕をねじり上げられてのバックスタイルは少女にとって屈辱的なようで、けれどその美貌は輝くような艶を増し、吐息はただただ甘くとろけていく。その尻孔は淫らに蠢き肉幹を搾り、腸粘膜は無数の舌と化して亀頭をねぶり上げるのだ。

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行
株式会社キルタイムコミュニケーション
〒104-0041　東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル
TEL03-3555-3431（販売）／FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改さん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。
ⓒKILL TIME COMMUNICATION　Printed in Japan

http://ktcom.jp/